



ある命題が他の命題の基づくとすれば、その前提は一つである（直接推理）か、二つである（間接推理）。ゆえに、ある命題を基礎付ける命題を遡行すると、3つではなく、遡るたびに前提の数が増えて行き、無限大になる場合が考えられる。（たとえば、規約主義のパラドックスがその典型的な例である。）（もっとも、前提の数が増大しても、その各々は、上の三つのどれかになるだろう。）

## 注2：ディレンマ、トリレンマ、の説明

dilemma（ディレンマ、両刀論法）：

$$\begin{array}{l}
 (1) \text{ 単純構成的ディレンマ} \\
 (p \text{ なら } r) \ \& \ (q \text{ なら } r) \\
 \hline
 p \text{ か } q \\
 \therefore r
 \end{array}$$

$$\begin{array}{l}
 (2) \text{ 複合構成的ディレンマ} \\
 (p \text{ なら } r) \ \& \ (q \text{ なら } s) \\
 \hline
 p \text{ か } q \\
 \therefore r \text{ か } s
 \end{array}$$

$$\begin{array}{l}
 (3) \text{ 単純破壊的ディレンマ} \\
 (p \text{ なら } q) \ \& \ (p \text{ なら } r) \\
 \hline
 \neg q \text{ か } \neg r \\
 \therefore \neg p
 \end{array}$$

$$\begin{array}{l}
 (4) \text{ 複合破壊的ディレンマ} \\
 (p \text{ なら } r) \ \& \ (q \text{ なら } s) \\
 \hline
 \neg r \text{ か } \neg s \\
 \therefore \neg p \text{ か } \neg q
 \end{array}$$

trilemma（トリレンマ、三刀論法）

$$\begin{array}{c}
 (1) \text{ 単純構成的トリレンマ} \\
 (p \text{ なら } s) \ \& \ (q \text{ なら } s) \ \& \ (r \text{ なら } s) \\
 \hline
 p \text{ か } q \text{ か } r \\
 \therefore s
 \end{array}$$

### ミュンヒハウゼンのトリレンマ

$$\begin{array}{c}
 p \text{ 「知の根拠付けが無限遡行する」ならば、} s \text{ 「知の最終的根拠づけは不可能」} \\
 q \text{ 「知の根拠付けが循環する」ならば、} s \text{ 「知の最終的根拠付けは不可能」} \\
 r \text{ 「知の根拠付けが断言に基づく」ならば、} s \text{ 「知の最終的根拠付けは不可能」} \\
 \hline
 p \text{ か } q \text{ か } r \\
 \therefore s
 \end{array}$$

### 注 3 : 古代懐疑主義

ミュンヒハウゼンのトリレンマは、古代の懐疑主義の「懐疑の方式」と非常に似ています

(参考文献 :

- 1、ジュリア・アナス、ジョナサン・バーズ『懐疑主義の方式』岩波書店
- 2、フィリップ・デ・レイシー「懐疑主義 (古代における)」  
リチャード・H・ポプキン「懐疑主義 (近代における)」  
(『西洋思想大事典』平凡社)
- 3、ポプキン『懐疑』紀ノ国屋書店)

### 3. [「Wikipedia」の「懐疑主義」の項目](#)

< 懐疑の 2 方式 >

「およそ認識によって把握されるところのものすべては、(1) 直接それ自身によって把握されるのであるか、それとも、(2) 他のものによって間接的に把握されるのであるかの、どちらかであるように思われる以上、彼らは、何か(1) それ自身によっても (2) 他のものによっても把握されないことを論じることにより、あらゆるものについての行き詰まりを導入すると考えるのである。

(1) まず、何ものも直接自己自身によって把握されないということは、感覚の対象となるあらゆるものと思惟の対象となるあらゆるものについて自然哲学者たちのあいだに行われてきたところの、意見の不一致を思えば明白である。

(2) さらに彼らは次の理由によって、何かが間接的に他のものを根拠として把握されるということも認めない。すなわちもし一方において、あるものがそれによって把握されるところの、その根拠となるものが、つねにまた別のものを根拠として把握されなければならないとすれば、循環論の方式、もしくは無限背進の方式の中へ追い込むことになる。他方しかし、もしあるものを把握するための根拠となるそのものが、直接自己自身によって把握されるというふうに考えようとするならば、なにものも既述の理由によって直接自己自身によって把握されることはないという原則が、これをしりぞける。」(セクストス『概要』第一巻178-9節)

古代懐疑主義者がここから導く結論は、エポケー（判断中止）であり、生き方としては、ある主義に執着しないという態度である。